

【会員だより 新卒紹介】

社会に出て

母校を巣立った短大 19 回生が社会の荒波に立ち向かって活躍しています。
その同窓生が、今の心境を素直な気持ちで書いてくれました。
お近くの先輩方には卒業生を今後とも宜しくご指導ご鞭撻をお願い致します。

診療放射線技師になって思うこと



近森病院 勤務 常光 麻那(短 19 回生)

私は、高知駅の駅前市街地に位置する近森病院に勤務しています。当院は、地域医療支援病院、災害拠点病院として、第二分院、リハビリ、オルソリハビリテーションなど隣り合った状態で連携し、「救急からリハビリ在宅ケア」までのトータル医療を目指し、チーム医療に努めています。合計で722床、診療放射線技師は19名です。現在外来センター棟を新たに建築中で新機器も導入予定です。

私にとって技師になるまでの道のりは楽なものではありませんでした。挫折しそうな時、アドバイスしてくれた友人や先生、そして最後まで支えてくれた両親に深く感謝しています。

「長い人生のなかのたった一年を思い出に残るくらい一生懸命勉強してみてもいいですか？これからの長い人生が決まるし、一生の資格を取ることが出来ます」と言われた先生の言葉も後押しに繋がりました。「あの時頑張ってたよ良かった」と今、心から思います。

半年が経った今、私の担当業務は、一般撮影、CT、ポータブル、TV撮影、心臓カテーテル検査等です。

最初は忙しい現場に戸惑いや不安を感じ、又基本的なことも覚えていない自分が情けなくなりました。救急患者さんへの撮影方法や接し方などは一定ではなく、先輩の対応、判断、技術を間近で見ることが、毎日が楽しい勉強の連続です。患者さんは技師を選ばせませんから、安心して検査を受けて頂くためには、技術の習得、迅速な判断、正確さ、スピード、コミュニケーション、チーム医療、優しさ、思いやりなど技師として必要だと思うことは沢山あります。いつも指導通りとはいかず、失敗も経験しながら、徐々に仕事が分かって今後は、多忙ななかいつも厳しく、優しく、熱心に多くのことを教えて下さる先輩に報いるためにも、一日も早く一人前の技師に成長するよう、初心を忘れずコツコツと勉強を続けていきたいと思えます。

放射線技師になって



南大阪病院 勤務 吉岡 友美(短 19 回生)

私の現在勤めている南大阪病院は、病床数475床、また検診センターも隣接している地域密着型の総合病院です。放射線技師数は18名で内、女性技師が3名です。

学校を卒業し、国家試験に合格する事に必死だった私が病院で放射線技師として働いていることが自分でも嘘のようです。学生時代、先生が「まだ学生の私達は、放射線技師のスタート地点にも立っていない」と話されていたことを思い出す度に、やっと放射線技師としてのスタートを切れたのだと実感しています。

病院で働き始めて半年が経ちました。しかし、まだまだ覚えることがたくさんあり日々勉強の毎日です。私が、実際に病院で働いて感じたのは患者様に自分の意思を伝えることが思っていたよりも難しかったということです。一般撮影で、患者様にポジショニングを行うのにも私の言い方一つで、適切なポジショニングが出来るか否かが決まり、撮影にかかる所要時間も変わってきます。また患者様は高齢の方が多く、声の大きさも大切だと感じました。私は元々声の大きい方ではなかったので、始めは大きな声を出すことにも苦労しました。

さらに、病院と検診センターで毎日のように行うマンモグラフィでも、実習先の病院で「マンモグラフィは患者様に気を

使う撮影」と言われていた通り、接遇面で患者様の羞恥心を和らげ、良い写真のために適確なポジショニングを行わなければいけないとても気をを使う撮影だと実感しています。

それは、自分が撮影した画像をもとに患者様の診断が行われ、自分の技術の未熟さで患者様の病変の有無が分からなくなってしまうという、とても恐ろしく責任のあることをしているのです。接遇面だけではなく技術面でも気を使わなければいけないということを病院で働き始めて知ることが出来ました。

ただ、どの撮影に対してもそれをもとに患者様の診断を行うのは同じです。この事を常に頭に入れておき放射線技師として良い撮影が出来るように日々、自己研鑽し技術を磨いていきたいと思います。まだまだ未熟な私ですが、よろしくをお願いします。

診療放射線技師になって



阿知須共立病院 勤務 濱野 裕也(短 19 回生)

私が勤務している病院は、24 時間救急対応を受け付け、介護福祉施設を併設しています。また、近隣の介護福祉施設とも協力するなど地域と密着した病院です。

当院では安心と信頼を提供するという理念のひとつを基に、地域の方々と親しく睦み、信頼しあうことで積み上げてきた貴重な財産をこれからも医療・予防・ケアの中で育むことを大切にしています。特に医療におきまして、急性期から慢性期までを担い、地域の方々のニーズに応えるよう、救急指定病院として適切な医療の提供を心がけています。また専門性を求められる患者様に対しては、近隣の中核病院に紹介・搬送できるよう連携がとられています。さらに近隣の地域の方々には往診も行っています。

当院での放射線技師の業務としては、一般撮影、透視撮影、マンモグラフィ、CT、MRI、検診業務が主となっています。入社当初はマニュアル通りの撮影や対応もできず、戸惑うことや失敗することも多くありました。半年がたった今でも、完全に納得できるような撮影はできていませんし、自分の判断で解決できないこともあります。自分で自信を持って行える仕事も増えてきました。

入社する際に『当院では国立病院や大学病院のように大きな設備や装置はないし実験もできないけれど、その中で最大限の力が発揮できるよう工夫や努力、勉強をしている。だからどこの学会や勉強会にいても自信をもって参加ができる。』という話を聞きました。

私も当院の一員として恥じることの無いよう日々勉強しながら技術や能力を高めています。

診療放射線技師として働き始めて感じたこと

津山第一病院 勤務 土居 拓也(短 19 回生)

平成 22 年3月に京都医療技術短期大学を卒業して、4月から津山第一病院で勤務しています。当院はベッド数 211 床で一般撮影、CT、MRI、透視を主な業務としています。現在診療放射線技師7名でこれらの業務を行っています。

就職してから半年が経ちました。この半年間で色々と感じることがありました。学生時代には診療放射線技師になるため基礎、知識を必死で覚えてきました。しかし、実際に働き始めてそれだけでは足りない部分もあり、教科書やプリント通りにポジショニングを行っても患者さんの体型、状態によって対応できないときなど必ずしも学校での知識では求められる画像が出来ないと痛感しました。どのように工夫して撮影すればいいかを自分で考え、先輩方のアドバイスをいただき、撮影できたことに対して自信、充実感を得ています。

患者さんの不安を少しでもやわらげられるように言葉使いや接し方など気を遣うようにしています。患者さんと話すときは笑顔で接し、体を触れるときには一言声をかけるようにしています。また、検査の説明時には患者さんが理解しやすい言葉で話すようにしています。検査が終わると患者さんに「ありがとう」などと言って下さることは何よりもうれしく、この仕事にやりがいを感じています。

救急ではその場の状況を見ながら素早く判断し、医師や看護師などの方々と連携をとっていかなければなりません。そのためには他の職種の方々の仕事内容も把握しなければならぬと感じています。

日々進歩していく医療についていくために月に一度、地区の診療放射線技師のレベルアップを目的に設立された研

研究会に参加しています。そこでは研究発表、講演会、フィルムディスカッションが行われています。他の病院での撮影方や症例などを聞き、自分の知識・技術を取り入れ、技師としてのレベルアップをしていきたいです。

以上

*通巻 198 号 2011 年 1 月 10 日発行(H22 - No.4)より